



小規模多機能ホームしょうわ

住み慣れた地域で「通い・宿泊・訪問」をニーズに合わせて利用でき、在宅生活を継続できるような支援を行う介護サービス施設。利用対象は市内在住で要介護認定を受けている人です。

所在地＝昭和町二丁目1－2

問い合わせ＝同館 ☎027-212-0660



1.元気に体操を行い健康を維持 2.食事は職員が館内で手作り。安心な家庭料理 3.血圧測定などで毎日健康状態をチェック。ここでも笑顔のコミュニケーションは欠かさない

ため、チーム体制で利用者の心のケアを表現しようという考えだ。

「二人暮らしの高齢者が多い昭和町。この施設も、カフェのように、誰でも気軽に立ち寄れる場所にしたい。お茶のみ話で寄ってもらって、介護が必要になる前に地域のことを知ってもらいたいですね」と話す。

ちよつとした意識で気付くこと
高齢者を地域社会で支えていく

しょうわでは、これからの高齢社会に対応できる地域の拠点になろうと、イベントなどで地域の人を呼び

込んでいるほか、民生委員や自治会などとの連携を強化している。

「牛乳配達をしている友人がいます。彼は地域のことをよく知っている。高齢者のお宅に牛乳がたまれば、すぐに異変を感じます。認知症や介護という視点で地域を歩けば、あつ、裸足の高齢者がいるから声掛けしてみようとなります」と三俣さん。認知症などの病気を理解し、意識していれば、誰でも気付けることがあるという。「歩いて通学している中学生や高校生が高齢者を見守ってくれたら地域はほんとに心強いですよね」

三俣さんの考える楽しく求心力のある介護施設は、超高齢社会で求められる一つの形だ。人が来るのを待っていたらいつまでも待ち続けることになる。必要なのは楽しくて人が集まりたくなるよう仕掛けていくことだ。

三俣さんは群馬県地域密着型サービス連絡協議会の中北部ブロック長も務めている。介護サービスの質をいかに高めていくか、多様な連携の中からの模索が続く。介護現場の仕事環境をよくすれば、利用者にとっても良いサービスにつながるの思もある。「これからの介護制度を超高齢社会に対応できるものにしていくには、現場の声を国に届けるのも大切なこと。それは私たちの責任でもあるんです」と三俣さん。変えていかなければ変わらない。介護のプロとしての誇りを持って、現場をリードしている。

必要に迫られないとなかなか介護について考えるのは難しいかもしれない。しかし、悩んだ時には、頼れる介護のプロが地域にいることを思い出してほしい。

三俣 和哉 さん 41歳
NPO法人三和会 理事長



人生を支援する、という責任 介護の仕事はサービス業だから

「おはようございます。今日もお変わりないですか」。元気なあいさつとにっこりとした笑顔。NPO法人三和会が運営する小規模多機能ホームしょうわでの当たり前の光景だ。介護はサービス業。理事長・三俣和哉さんの考えがしつかり浸透している。

「学ぶことばかりなんですよ。ここにいる皆さんは人生の先輩ですから」と話すのは、昨年9月から介護の仕事をはじめた安達さん。同じ利用者相手でも、その日の気分に合わせて対応を変えていけるよう試行錯誤しながら仕事に励んでいる。

この日は若い従業員の多い日。ある利用者は「本当の孫のように思っている」と笑顔で話してくれた。

ことし4月に仕事を始めた清水さんは、「一人になって利用者がさんがいたらすぐに声をかけます。でも私と二人で話すのではなくて、みんなの輪に入っていけるようにお声掛けをします」と介護のプロとしての振る舞いを意識する。介護職2年目の青山さんは「孫のようと言ってくださるのは、信頼関係があるということだと思います。人と人が接する介護の現場では、対等に、お互いを尊重するというのは自然なことですよね」と話してくれた。

野球をやっている三俣さんは、職場を一つのチームだと考えている。

「自分はいくまでチームのキャプテン。どうしたらうまくいくか、従業員と一緒に考えていかないと」

従業員の発案を尊重し、ボトムアップで風通しのよい職場づくりを行う。職場環境が悪くなれば、利用者へのサービスの質に悪影響が。その



清水 ゆかり さん 29歳



青山 未央 さん 27歳



安達 佳代 さん 32歳